

## この高貴なるもの

モクセイの香り漂うところ、私の身近い関係だけで三人の死亡者があった。日田の山里からの姑しゅうしよの死を知らせた便りはあまりにも悲痛であった。

その一節に、「母は清潔というものは全く置き忘れた人のようになり、拾って食べたり、トイレでない所に排便したり、自分では何一つしようとせず、生きることを放棄してしまいました」と、ボケてしまった姑への痛ましい思い出を伝えていた。

「昼は眠って夜覚めて何度も起こされると、少しはガマンして、私もお勤めがあるのよ、とケンのある言葉でたしなめた」ことを、激しくざんげざんげもしている。それはそのまま世話する側の悲惨さを物語るものでもある。

老人問題の深刻さは、心身が弱りつつも長生きさせられることにある。精神の衰弱、つまりボケについては行政上何の施策もない。このことは緊急困難なものは一番後回しという日本の福祉行政のよい見本である。県下でもボケ老人は五千人を下らないだろう。精神病院もそれを相手にせず、また、頼りにされる力もない。国が動かないか

ら、県が着手すべきである。ボケ専門の病院や特養ホームの設立が緊急事であることは、県の「プロジェクトチーム」（本紙十・六）をまつまでもなく自明のことだ。

先の嫁の便りの末尾を読もう。「でもね、先生。一人で入れなかつたおふろに母を抱いて入った時、母が「今度生まれくる時も親と子であるとよいがね」とボケた頭でいつてくれた時は、母がいなかつたらどんなに楽だろう」と時折考えた私は、死にたいほど自分がいやになりました」。

ああ、人間。この複雑なもの。ボケても全部がボケるのではない。老いはただ苦。人間苦を回つてこの姑と嫁が織り成す世界に、高貴なる人間の残照があつた。

（一九八二年十月十五日）